

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
看護の実践と統合	看護論	1	30	3	1	専任教員
科 目 目 標						
看護理論から専門的な視野を広げ、自己の看護観を深める。						
講 義 内 容						留 意 点 等
<p>1回目： 看護理論の目的と考え方            主な理論家の考え方①</p> <p>2回目： 主な理論家の考え方②</p> <p>3回目： 主な理論家の考え方③            ※主な理論家；ナイチンゲール、ヘンダーソン、ペプロウ、            トラベルビー、ワトソン、オレム、ロイ、            ベティ・ニューマン、ベナー</p> <p>4回目： 看護研究の意義、研究デザイン</p> <p>5回目： 看護研究の計画とプロセス ※遠隔授業</p> <p>6回目： 文献検索の方法、文献のクリティークの視点・            方法</p> <p>7回目： ケーススタディの意義、すすめ方</p> <p>8回目： ケーススタディの限界と倫理的配慮            テーマ選定、計画書の書き方</p> <p>9回目： 患者の見方、記録            ケーススタディの留意点と原則</p> <p>10回目： レポートのまとめ方            発表の仕方</p> <p>11～14回目： ケーススタディの実際</p> <p>15回目： まとめ・試験</p>						<p>*ケーススタディは夏季休業            前までに1例まとめる</p>
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
「ケースを通してやさしく学ぶ看護理論」日総研 「はじめの一步からやさしく進める かんたん看護研究」南江堂 「わかりやすいケーススタディの進め方」照林社						
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・グループワーク・レポート作成			ケーススタディレポート 80% 筆記試験 20%			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
在宅看護論	在宅看護概論	1	15	2	1	院外講師
科 目 目 標						
地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、他職種と協働する中での看護の役割を理解する。						
講 義 内 容						留意点等
<p>1回目:在宅看護の概念 日本の在宅看護の歴史と現状 日本の在宅看護の変遷 在宅看護の社会背景 国民の価値観 疾病や障害がある者の社会参加 在宅ケアと在宅看護 在宅チームケアの意義 在宅ケアチームにおける看護師の役割</p> <p>2回目:在宅看護の倫理と基本理念 自己決定支援 価値観の尊重と意思決定支援 QOLの維持 セルフケア 社会参加の援助 アドボカシー 虐待防止 個人情報の保護と管理 サービス提供者の権利の保護</p> <p>3回目:在宅療養者と家族の支援 在宅療養者と家族 疾病がある者と家族 障害がある者と家族 在宅療養の成立条件 家族の介護力のアセスメントと調整 家族関係の調整 家族の介護負担とその軽減 ケア方法の指導 介護者の健康 レスパイトケア</p> <p>4回目:在宅療養を支える制度と社会資源 在宅医療・介護に関する仕組み 社会資源とは</p> <p>5回目:在宅療養を支える看護 保健所・市町村保健センターにおける看護活動 地域包括支援センターにおける看護活動 入所施設・通所施設における看護活動 訪問看護 外来看護</p> <p>6回目:療養の場の移行に伴う看護活動 医療機関との入退院時の連携 地域連携クリニカルパス・外来・病棟・退院支援部門・診療所</p> <p>7回目:療養の場の移行に伴う看護活動 施設との入退院時の連携 介護保険施設等の公的施設 サービス付き高齢者向け住宅などの民間施設</p> <p>8回目:試験(45分)</p>						
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
新体系看護学全書統合分野 「在宅看護論」 メヂカルフレンド社			看護実践のための根拠がわかる 在宅看護技術 メヂカルフレンド社			
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義			筆記試験			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
在宅看護論	在宅援助方法 (政策医療看護)	1	30	2	2	院外講師
科 目 目 標						
在宅で療養する対象者の看護方法を学ぶ。 国立病院機構が担う政策医療看護の在宅における看護方法を学ぶ。						
講 義 内 容						留意点等
<p>1回目：在宅ケアを支える訪問看護ステーション 設置・管理運営 訪問看護の変遷 訪問看護の提供方法と種類 訪問看護制度の課題 訪問看護ステーションの開設基準 訪問看護サービスの管理・運営 従事者と対象者 サービス内容とサービスの流れ 訪問看護のサービス開始までの流れ 訪問看護サービスの展開 訪問看護サービスの質保証 利用料</p> <p>2回目：訪問看護制度の法的枠組み 健康保険法 介護保険法 障害者総合支援法 高齢者を支える取り組み・法律</p> <p>3回目：訪問看護におけるチームケア 多職種との連携・協働</p> <p>4回目：訪問看護におけるチームケア 看護師同士の連携・協働</p> <p>5回目：訪問看護におけるチームケア 看護職の役割・チームケアの実践</p> <p>6回目：在宅看護における安全と危機管理 生活の中で必要となる安全管理 家屋環境の調整 転倒・転落の防止 誤嚥・窒息の防止 熱傷・凍傷の防止 熱中症の予防 閉じこもりの予防 独居高齢者と火災防災 災害時における在宅療養者と家族の 健康危機管理 在宅療養者・家族への防災対策の指導 医療機関との連携による医療上の健康危機管理 福祉機関との連携による生活上の健康危機管理 行政（市町村・消防署・警察等）との連携</p>		<p>7回目：在宅療養者の状態に応じた看護 生活動作の低下及び疾病の再発の予防が必要な 療養者 日常生活のアセスメントと環境整備 在宅療養者と家族のセルフマネジメント力維持・ 向上のための支援 異常の早期発見と対応 社会資源の活用・調整 介護予防を必要とする高齢者 感染症をもつ療養者 急性期にある療養者 緊急性と重症度のアセスメント 状態に合わせた対応・調整 急性症状への対応 感染症への対応 慢性期にある療養者 慢性期の特徴を踏まえた状態のアセスメント 状態に合わせた対応・調整 急性増悪の早期発見と対応 社会資源の活用・調整 回復期にある療養者 在宅におけるリハビリテーション 生活機能・日常生活動作のアセスメント 状態に合わせた対応・調整 合併症の予防と対応 居住環境のアセスメントと対応・調整 社会資源の活用・調整</p> <p>8回目：終末期にある療養者 症状マネジメント 終末期緩和ケアの実践 看取りの看護 家族へのグリーフケア</p> <p>9回目：地域で療養する子ども 在宅での療養を希望する精神障害者</p> <p>10回目：在宅の認知症高齢者</p> <p>11回目・12回目： 神経難病患者の看護と技術援助、在宅看護支援</p> <p>13回目：筋ジストロフィー症患者の看護と技術援助、 在宅看護支援</p> <p>14回目：重症心身障害児の看護と技術援助、 在宅看護支援</p> <p>15回目：まとめ・試験</p>				
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
新体系看護学全書統合分野 「在宅看護論」 メヂカルフレンド社			看護実践のための根拠がわかる 在宅看護技術 メヂカルフレンド社			
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義			筆記試験			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
在宅看護論	在宅援助技術	1	30	2	2	院外講師
科 目 目 標						
在宅看護で活用する看護技術の実際を学ぶ。						
講 義 内 容						留 意 点 等
1回目:訪問看護における看護過程の特徴 2回目:在宅看護過程の実際・ 家庭訪問・初回訪問 3回目:訪問看護の記録① 事例からのアセスメント 4回目:訪問看護の記録② 事例からの計画立案 5回目・6回目: 訪問看護の記録③ 事例のアセスメント・計画立案 7回目:在宅における日常生活支援① 食事の援助 8回目:在宅における日常生活支援② 清潔の援助・移動の援助・排泄の援助 9回目:在宅における医療管理を必要とする人と看護① 薬物療法 10回目:在宅における医療管理を必要とする人と看護② 酸素療法 人工呼吸療法 11回目:在宅における医療管理を必要とする人と看護③ 膀胱留置カテーテル法 腹膜透析 (CAPD) 12回目:在宅における医療管理を必要とする人と看護④ 胃瘻、経管・経腸栄養法 中心静脈栄養法 13回目:褥瘡管理 褥瘡発生のリスクアセスメントと予防、処置 14回目:褥瘡管理 除圧・体位変換に関する器具の種類と選択 15回目:まとめ・試験						演示 在宅での褥瘡予防 除圧 ポジショニング
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
新体系看護学全書統合分野 「在宅看護論」 メヂカルフレンド社			看護実践のための根拠がわかる 在宅看護技術 メヂカルフレンド社			
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・演示			筆記試験			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
在宅看護論	在宅援助論演習	1	15	2	2	院外講師
科 目 目 標						
他職種との連携の中で在宅看護の役割を学ぶ。						
						留意点等
<p>1回目:            在宅ケアのケアマネジメント            地域包括ケアシステムとは            地域包括ケアシステムの体制            在宅ケアのシステムとチーム            関連機関・関連職種との連携・協働            行政との連携            機関・職種の役割            双方向で行う連携の目的と看護の役割            地域包括支援センターとの連携            機関・職種の役割            双方向で行う連携の目的と看護の役割            居宅介護支援事業所との連携            機関・職種の役割            双方向で行う連携の目的と看護の役割            介護サービス事業所との連携            機関・職種の役割            双方向で行う連携の目的と看護の役割            住民との連携            ボランティア等の必要性と連携            連携・協働を推進するポイント            会議（カンファレンス）の活用</p> <p>2回目:在宅看護におけるケースマネジメント            看護が担うケースマネジメント            サービスの統合、ケアの継続            残存機能の維持・向上            多様化したニーズへの対応            意思決定支援</p> <p>3回目・4回目・5回目・6回目:            ケアマネジメントの過程            ニーズのアセスメント            ニーズに合わせたサービスの選択・計画            サービスを結びつける調整            実施、モニタリング、評価、フィードバック</p> <p>7回目:社会資源の理解と活用            8回目:試験</p>						<p>演習:            事例展開            精神・小児・難病・高齢者            終末期（癌）</p>
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
新体系看護学全書統合分野 「在宅看護論」 メヂカルフレンド社			看護実践のための根拠がわかる 在宅看護技術 メヂカルフレンド社			
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・演習			筆記試験 20 % 個人・グループでの課題 80 %			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
看護の実践と統合	看護論	1	30	3	1	専任教員
科 目 目 標						
看護理論から専門的な視野を広げ、自己の看護観を深める。						
講 義 内 容						留意点等
<p>1回目： 看護理論の目的と考え方                      主な理論家の考え方①</p> <p>2回目： 主な理論家の考え方②</p> <p>3回目： 主な理論家の考え方③                      ※主な理論家；ナイチンゲール、ヘンダーソン、ペプロウ、                      トラベルビー、ワトソン、オレム、ロイ、                      ベティ・ニューマン、ベナー</p> <p>4回目： 看護研究の意義、研究デザイン</p> <p>5回目： 看護研究の計画とプロセス ※遠隔授業</p> <p>6回目： 文献検索の方法、文献のクリティークの視点・                      方法</p> <p>7回目： ケーススタディの意義、すすめ方</p> <p>8回目： ケーススタディの限界と倫理的配慮                      テーマ選定、計画書の書き方</p> <p>9回目： 患者の見方、記録                      ケーススタディの留意点と原則</p> <p>10回目： レポートのまとめ方                      発表の仕方</p> <p>11～14回目： ケーススタディの実際</p> <p>15回目： まとめ・試験</p>						<p>*ケーススタディは夏季休業                      前までに1例まとめる</p>
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
「ケースを通してやさしく学ぶ看護理論」日総研 「はじめの一步からやさしく進める かんたん看護研究」南江堂 「わかりやすいケーススタディの進め方」照林社						
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・グループワーク・レポート作成			ケーススタディレポート 80% 筆記試験 20%			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
看護の実践と統合	医療安全	1	15	2	2	院内講師(医療安全 看護師長)
科 目 目 標						
医療安全に必要な知識を学ぶ。						
講 義 内 容						留意点等
<p>1回目：医療安全と看護の理念 医療安全の意味とその重要性 看護職の法的規定と医療安全</p> <p>2回目：医療安全への取り組みと医療の質の評価 医療事故の報告制度 事故発生メカニズムとリスクマネジメント</p> <p>3回目：事故発生メカニズム 事故分析 ・医療事故・インシデントレポートの分析と活用 ・RCA（根本原因分析） 事故対策 ・KYT（危険予知トレーニング）</p> <p>4回目：患者・家族との協働と安全文化の醸成 事故対策 ・KYT（危険予知トレーニング）</p> <p>5回目：時系列関連図作成</p> <p>6回目：事故分析 RCA（根本原因分析）</p> <p>7回目：看護における医療事故と安全対策 看護業務と事故発生要因 医療事故の種類：その分析と対策 ・誤薬、患者取り違い（誤認）、針刺し、転倒転落 誤嚥、チューブ類のトラブル、電子カルテ等情報伝達時のトラブル（情報伝達と共有・管理） 在宅看護における医療事故と安全対策 医療従事者の安全を脅かすリスクと対策 医療事故後の対応</p> <p>8回目：試験（45分）</p>						RCA、KYTについてグループワークを行う。
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
ナースンググラフィカ 看護の統合と実践②「医療安全」 メディカ出版						
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・演習			筆記試験			

領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期	担当講師
看護の実践と統合	看護マネジメント	1	30	3 1	院内講師(看護部長・副看護部長) 専任教員
科 目 目 標					
看護マネジメント能力を身につけ、他職種との連携や様々な医療活動での看護職の役割について理解する。					
講 義 内 容					留意点等
<p>1回目：看護管理過程 組織とマネジメント 看護管理 組織とその構造 看護師の仕事とその管理 1)勤務体制 2)重症度、看護必要度 3)情報の管理 看護業務管理 1)看護業務基準 2)看護手順</p> <p>2回目：看護の質保証と看護管理① 看護サービスの組織化 組織で取り組むケアの改革 1)看護の専門性と多職種連携 2)クリニカルパス</p> <p>3回目：看護の質保証と看護管理② 患者の権利擁護と看護管理 安全管理体制 看護実践の評価と改善 1)病院機能評価</p> <p>4回目：看護管理のスキル 組織の効率化を高める技術</p> <p>5回目：看護と経営 病院の組織と看護部門 経営とは 病床機能報告 診療報酬制度</p> <p>6回目：看護職と生涯学習 認定・専門看護師の資格と活動 継続教育、キャリア開発 特定行為に係る看護師の研修制度</p> <p>7回目：看護に関する法律・制度 看護と法令 看護と行政</p> <p>8回目：災害看護 災害とは 災害看護とは 災害の種類と特徴 自然災害 人為的災害 特殊災害 複合災害</p> <p>9回目：災害医療に関する国の政策と法律 災害医療に関する国の政策 災害に関する法律</p> <p>10回目：災害各期の看護① 静穏期(減災・防災マネジメント) 初動時(超急性期・急性期)における看護活動 医療救護所(急性期)における看護活動 避難所(急性期)における看護活動</p> <p>11回目：災害各期の看護② 応急仮設住宅(慢性期)における看護活動 復興期の看護活動 要援護者への看護</p> <p>12回目：国際看護とは 国際社会の現状と国際看護活動の課題 国家・地域間の健康格差 ミレニアム開発目標 人間安全保障 諸外国における看護制度</p> <p>13回目：国際看護活動の支援を必要とする対象 在日外国人への看護活動 在日外国人の保健医療問題 在外日本人・帰国日本人 保健医療分野における国際機関 国としての国際協力活動 国際看護活動を推進する人々</p> <p>14回目：異文化理解と国際看護活動 文化を考慮した看護 国際看護活動を推進する人と機関</p> <p>15回目：まとめ・試験</p>					14回目の内容は、JICA職員より講義をうける。
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト		
ナーシンググラフィカ 看護の統合と実践①「看護管理」 看護の統合と実践③「災害看護」メディカ出版 新体系看護学全書 看護の統合と実践3「国際看護学」メヂカルフレンド					
主とする授業形態			評 価 方 法		
講義			筆記試験		



領域:統合分野

学科目	授業科目	単位	時間数	履修学年・学期		担当講師
看護の実践と統合	統合演習	1	30	3	1	専任教員
科 目 目 標						
知識・技術・態度を統合し、対象の状況に合わせ適切な判断・対応ができるよう、看護の実践力を身につける。						
講 義 内 容						留 意 点 等
<p>1回目：同時に複数課題が生じた際の優先順位の考え方                  2回目：一人の対象〈事例Ⅰ〉に実施すべき援助計画の立案                  3・4回目：〈事例Ⅰ〉援助の実施                            複数の看護技術の実施                  5回目：〈事例Ⅰ〉割り込み状況への対処                            状況判断                            対象の状況に応じた観察                            優先順位の決定                            時間管理                            対象への説明と同意                            他のメンバー・リーダー・他職種との調整                            自己の能力の査定                  6回目：〈事例Ⅰ〉評価・修正                            一人の対象〈事例Ⅱ〉に実施すべき援助計画の立案                  7回目：〈事例Ⅱ〉援助の実施                  8回目：〈事例Ⅱ〉割り込み状況への対処                  9回目：〈事例Ⅱ〉評価・修正                            複数の対象への援助                            状況判断                            対象の状況に応じた観察                  10回目：複数の対象〈事例Ⅲ〉に実施すべき援助計画の立案                  11・12回目：〈事例Ⅲ〉援助の実施                  13回目：〈事例Ⅲ〉割り込み状況への対処                  14回目：〈事例Ⅲ〉評価・修正                  15回目：まとめ</p>						<p>演習：                  ・ペーパーペイシエントを用いた看護計画と実践（一人の対象及び複数の対象）                  ・複数の看護技術の実施（酸素吸入療法、輸液ポンプの操作）</p>
テ キ ス ト			サ ブ テ キ ス ト			
講師の資料			根拠と事故防止から見た基礎・臨床看護技術			
主とする授業形態			評 価 方 法			
講義・演習			演習への参加状況、レポート等			